

小・中・高等学校の系統性に配慮した被服製作題材の検討

川合みちる

(奈良県立磯城野高等学校)

谷口明子・平嶋恵子

(奈良教育大学附属小学校)

中嶋たや

(奈良教育大学附属中学校)

菱田道代

((元)奈良教育大学附属小学校)

河崎智恵・鈴木洋子

(奈良教育大学生活科学教育教室)

Study on the Systematic Matter of Clothing Construction in Home Economics Education
in Elementary School, Junior High School and High School

Michiru KAWAI

(Shikino High School)

Akiko TANIGUCHI, Noriko HIRASHIMA

(Elementary School Attached to Nara University of Education)

Taya NAKASHIMA

(Junior High School Attached to Nara University of Education)

Michiyo HISHIDA

(Former Elementary School Attached to Nara University of Education University)

Tomoe KAWASAKI, Yoko SUZUKI

(Department of Home Economics Education, Nara University of Education)

要旨：本研究では、家庭科の被服製作学習における教育現場の実態をふまえて、小・中・高等学校の系統性に配慮した被服製作題材について検討した。まず現行の授業実践より、被服製作学習における課題と問題点を明らかにした上で、学校における被服製作学習時間と製作題材を確認した。被服製作において必要な技能技術等を現行の小・中・高等学校の教科書を参考に抽出し、技能技術等と学校種別の製作題材について整理したところ、小・中・高等学校において扱う技能技術等の重複が認められた。そこで、縫製技能技術等と指導に適正な学校種について考察を行い、小学校では基礎的な技能技術を、中学校ではその定着を、高等学校で製作手順図を用いた製作力の育成が望まれるという結論を得た。最終的に、被服製作に必要な技能技術等と学校種を考慮した小学校から高等学校までの製作題材を提示した。今後は、この配列にもとづいた授業実践が課題である。

キーワード：家庭科 Home Economics Education 被服製作 Clothing Construction

教材配列 Sequence of Teaching Materials 小学校 Elementary School

中学校 Junior High School 高等学校 High School

1. はじめに

本研究報告は、2007年度奈良教育大学教育実践総合センタープロジェクト研究(研究テーマ:小・中・高等学校家庭科の被服製作教材の研究)の報告である。

家庭科は生活実践力の育成を図る教科であり、製作は実践に直接結びつく技能の習得に欠かせないが、指導時間数は削減の一途をたどっている。旧学習指導要領から現行の学習指導要領への改訂においては、小学校家庭科では「ほころび直し」が削除された¹⁾。中学校

技術・家庭科では、日常着の適切な手入れと補修については全ての生徒が履修するが、簡単な衣服の製作については選択となり、「手芸」は削除された²⁾。高等学校においては、家庭総合(4単位)では「生活の科学と文化」の中に被服製作の内容が盛り込まれているが、家庭基礎(2単位)では「家族の生活と健康」等の一部として扱われ、実質的な削除となった³⁾。教育現場では、児童・生徒の生活経験の乏しさによりレディネスが低い上に、授業時間削減を強いられ、短時間で製作可能な基本的内容の指導を余儀なくされているのが実情である。

被服製作学習に否定的な教員の中には、既製服が充足する現代において、「作品を着用しない」「時代にそぐわない」「既製服の方が安い」等の意見も散見されるが⁴⁾、製作の楽しさや達成感などから学習者の被服製作学習に対する意欲は高く、手指の巧緻性を高める点においても、教育的意義は計り知れない。今後、被服製作実習を継続させていくためには、実態に照らした題材や教材の検討が必要である。

そこで、本研究では、現状の授業実践から被服製作の課題を明確にしたうえで、系統性のある題材の配列を検討する。具体的には、小・中・高等学校の授業実践を分析して、技能技術の観点より題材の配列を検討し、有用な題材を提示する。また、小・中・高等学校の系統性に基づく指導方法の工夫について議論した。

2. 研究会の開催

計7回に亘る研究会を開催し、研究テーマに取り組んだ。

第1回：学校種ごとに、年間学習計画における衣生活学習の配置、被服製作題材とそのねらい、児童生徒の技能習得状況、製作品の家庭生活での使用状況等の報告を行った。

第2回：各員が家庭科関連の雑誌やインターネットで検索した被服製作の実践から注目すべき実践を選出し報告した。これらをふまえて被服製作学習が抱える課題について話し合った。

第3回：小学校教材「袋」の応用教材である「1枚の布からつくるポケットのある小物入れ」を実際に製作し、被服製作を通して育む力について検討した。

第4回：被服製作に必要な技能技術の整理にあたり、小・中・高等学校の家庭科教科書から被服製作の関連用語を抽出した。

第5回：教科書から抽出した被服関連用語を整理し、現行の実践と比較し、被服製作に必要な技能技術及び製作題材の指導に適切な学校種、ならびに被服製作題材について検討した。

第6回：新規に取り入れた実践を報告し、その是非

を話し合った。

第7回：研究のまとめ方を検討した。

3. 結果及び考察

3.1. 現行の実践の課題と問題点

3.1.1. 小学校

現行学習指導要領(平成10年改定)において、小学校では次のような点が改定された。まず、各学年とも衣食住の3領域で示していたことを改め、多様な題材構成ができるよう、「家庭生活と家族」「衣服への関心」「生活に役立つ物の製作」「食事への関心」「簡単な調理」「住まい方への関心」「物や金銭の使い方と買い物」「家庭生活の工夫」に関する8つの内容項目に整理統合された。また「米飯とみそ汁の調理」以外の題材の指定がなくなり、内容が2学年まとめて示され、各学校の実態に応じた弾力的な指導ができるようになった。さらに、授業時間数が年間70時間から、第5学年は60時間に、第6学年は55時間に削減された。

このような改訂をうけて実施した授業実践においては、新たな問題点が浮上してきた。子どもたちの製作に対する関心は高く、「こんな物を作りたい」「縫えるようになりたい」と意欲的である。しかし、実際に針やミシンを使用した経験は少なく、技術面での個人差も大きい。児童の意欲・関心を活かして、全ての児童に基礎的な技能を身につけさせたいものの、製作時間と製作題材の減少により、実際の指導は益々困難となっている。

また題材の弾力化により、「袋の製作」「簡単なエプロンやカバーの製作」などの指定題材から、「布で作ってみよう」「生活を楽しくする物を作ろう」等の自由題材に変化している。子どもたちは自分の作りたい物を決めて、それぞれが自由に組み合わさった反面、身につけるべき技能がはっきり認識されず、作ること自体が目標となる傾向にある。

さらに、製作時間の短縮のため、市販の教材セットの使用等によって、裁断済みの布しか扱えない子どもも少なくない。ものづくりでは、使用目的に適した製作が重要であると考えられるが、現実には、題材で身につけるべき技能の定着が難しく、生活の工夫に結びつかない現状にある。

このような実態をふまえると、限られた時間内で、すべての子どもに基礎的な技能が身につけられるよう、系統的に題材を選択していく必要がある。

3.1.2. 中学校

現行学習指導要領(平成10年改定)においては中学校の技術・家庭科の授業時間が、第1学年2時間、第2学年2時間、第3学年1時間になって久しい。現在、家庭科としての実質授業時間は、第1学年1時間、第2学年1時間、第3学年0.5時間である。ただし第3学

年の0.5時間では、3学期の受験期にはほとんど授業ができない。この事態を回避するために、研究メンバーの勤務校では第3学年の技術・家庭科の授業時間を2時間に設定している。

一方、生徒の大半は現在の生活の「便利さ」をそのままに受け入れている。生徒の実態をふまえると、被服を選択する能力の育成が求められる。そのためには、被服の役割、特に健康な衣生活の理解、衣服の構造と体の関係の理解、大量生産・大量消費の波に流されるのでなく、1つ1つの被服を大切に着ていくために必要な基礎縫いの技能習得が必要となる。

しかし、現状の授業時間の中で、被服領域にかけられる時間は少ない。「被服の製作をやめて、基礎縫いの習得のみに絞った教材にする方がよいのではないか」という葛藤を経て、「健康な衣生活を意識させるためには、実際に身に付けることができる衣服を製作することが不可欠である」との結論に至った。

そこで、身につけさせる技能を、基礎縫いの能力に焦点化した被服製作実習を検討・実施した。ただし、現在の生徒の実態に合わせて、妥協をせざるを得ない面もあり、体の構造と衣服の関係の学習は、ミニサイズの紙のショートパンツ作りと教師の示範製作のみとし、できあがり線などは布にプリント済みの市販教材を使用している。この学習過程において、先に述べた力を最大限身に付けさせることを模索している。

現状では、小学校でミシンや基礎縫いの学習をしても、家庭で復習するチャンスがないため、ミシンの糸かけなど使い方の復習から始めなくてはならない。既に被服製作を行わず、基礎縫いの履修が可能な小物作りを行っている学校も多い。しかし、小学校では小物・平面構成のエプロンの製作をする場合が多く、体の構造と衣服の関係を学習するためにも、中学校では、ショートパンツの製作が必要であると考え。プリント済みの教材使用により、「衣服の各部の名称を理解していないために、説明を理解できない」、「できあがり線の重要性が分かっていない」という新たな問題点も確認しており、被服製作題材の検討を重ねている。

3.1.3. 高等学校

教育課程が、女子のみ家庭科(4単位)から男女共通必修の「家庭一般」(4単位)を経て、「家庭総合」(4単位)「家庭基礎」「生活技術」(2単位)の選択履修へと変化する中で、家庭での経験の少なさとそれに伴う技術力の低下を痛感せざるを得ない。小・中学校で学んだことを家庭において反復する機会が減少し、技術を定着することが難しくなっているように思う。さらに、家庭での伝達力も薄れている。女子のみ家庭科の時代は、作品をこっそり家に持ち帰り、母や祖母に手伝ってもらった生徒がいた。そのため、作業が遅れがちな生徒に対して個人的に放課後や朝の補習を行い、学校で作品を仕上げられるよう心をくだいたものだ。そ

れが、家庭でのミシンの使用目的も、洋服製作から、袋物や雑巾などの小物製作へと変わり、使用頻度も徐々に減ってきて、ミシンのない家庭の方が多くなってきた。学期始めに必ず作った雑巾も、市販の雑巾にとって代わられるようになっていく。そうすると「お母さんに聞いても分からない」「家の裁縫箱を見たことがない」と言い出す生徒が出てきた。親から子へと自然に行われてきた「縫う」(その周辺も含む)技術の伝達には全く期待できないのが現状と言える。

このような現状を受けて、高等学校「家庭総合」の被服製作実習の題材選択も毎年試行錯誤しているのが正直な所である。「家庭総合」4単位の場合、約24時間を衣生活分野の学習に充て、そのうちの10時間程度で被服製作実習を行っている。被服製作実習に充てる時間に変化はないものの、題材は時代と共に難易度を下げているといえる。具体的には、女子のみ家庭科の時代はスカートや女児服を、男女共通必修当初はスカートから男子も履けるショートパンツへ、技術力の低下を実感する中でエプロンへと、移行している。一つのをじっくり取り組む集中力・持久力の不足を感じる近年は、被服にこだわらず布を使って「基礎縫い」の技術を身につけるということに主眼を置いた題材設定に変えた。すなわちエコバッグとステンシル、ファイルカバーと刺繍、巾着袋にアップリケといった組み合わせである。ただ、「題材については、身体の軀幹部を覆う「衣服」を中心として扱い〜」とする学習指導要領との溝があり、「体形・身体の動きを押さえ衣服製作実習か、技術定着をはかる衣服以外の布を使った製作実習か」で揺れ動いている。

以上が、教師側の見方であるが、生徒側の見方について、平成17年度田原本農業高等学校(現在磯城野高等学校)の農業科の3年生の生徒に実施した「被服製作実習に関する事前アンケート」の結果を紹介する(表1、表2、表3)。無回答や不明な回答もあり、有効実数のみを数字で示している。

被服の補修は、保護者にしてもらおうことが多いが、自分で行う生徒もいる。「基礎縫い」は小学校で一通り習ってきているが、家で補修等を自分でしないこともあり、その技術には相対的に自信がない。生徒はたとえ出来なくても、必要な技術とは認識している。今の技術に自信はないが、男女ともに「布を使って、何か自分で作ってみたい。」という意欲はある。このアンケートの結果を受けて、その年の題材は、「袋」とし、生徒の好きな大きさ、好きな形、好きな装飾(アップリケや刺繍)としたところ、意欲も増し、例年になく各々が積極的に励む実習となった。

また、ヒューマンライフ科という保育と福祉に関する専門教科を多く持つ科の「家庭総合」では、保育分野の学習と合わせて布絵本を「基礎縫い」の学習教材としている。生徒の技術と意欲に合わせての実習は、

表1 高校生の衣生活実態 - 衣服の補修等について -

衣生活場面における対処方法		男子	女子	
必要な補修	裾	まつり縫いをする	2	7
		まつり縫いをしてもらう	13	14
		安全ピンでとめる	3	2
		ほつれたまま着用	18	7
		捨てる	4	0
	ボタン	自分で縫いつける	5	18
		縫いつけてもらう	21	15
		安全ピンでとめる	1	0
		とれたまま着用	9	1
		捨てる	4	0
	ファスナー	自分で取り替える	2	3
		人に取り替えてもらう	16	16
		壊れたまま使用 (安全ピンも含む)	6	2
		捨てる	14	9
	雑巾が必要	自分で縫う	9	10
ぬってもらう		14	2	
買う		14	18	

表2 高校生の衣生活実態 - 裁縫の技能技術について -

裁縫の技能技術	習った時期		出来る自信		必要と思うか	
	小学	中学	ある	ない	はい	いいえ
なみ縫い	35	3	15	16	25	2
返し縫い	25	5	11	16	20	2
まつり縫い	18	5	5	16	16	6
ボタ付け	20	3	10	15	21	7
スナップ付け	18	2	5	15	10	8
ファスナー付け	6	3	2	17	14	7
ミシン縫い	33	3	14	17	25	5

表3 高校生の衣生活実態 - 今後作ってみたいもの -

希望製作題材	男子	女子
服	9	3
手持ちの服のアレンジ	4	5
かばんなどの持ち物	10	8
お守りやマスコット	5	7
将来の子どもの入園グッズ	0	6
その他 (壁かけ・座布団など)	9	5

指導が個々人になるので把握が大変な反面、生徒にとっては「自分だけの1冊」を作りあげるといふ満足感を与える結果となっている。本年度入学の生徒は、布絵本を中学校時に作ったということもあり、布絵本のかわりにエプロンシアターを題材としてみた。自分の演じたい作品をイメージしての製作となり、布絵本より

やや難しかったようだ。

高等学校の被服製作実習では、生徒個々人の好みに合った作品を、小・中学校で学んだ色々な技法を用いて作らせることが、意欲向上のためにも必要かと思われる。

近年、「家庭総合」より「家庭基礎」を選択する高等学校、学科、コースが増加している。「家庭基礎」においては、衣生活分野の学習は平均して6時間しかとれないのが現状である。6時間の講義だけでは実践的態度の育成には不十分と考え、2時間の実習(基礎縫いによる巾着袋やミニ刺し子布巾等)を取り入れている。2時間では技能の定着には至らないが、ホームプロジェクトを含めた課外活動のきっかけ作りになっているように思う。「家庭基礎」では、衣生活分野にこだわらず、保育・福祉分野や消費・環境分野等の中に「布絵本・エプロンシアター」や「リフォーム」といった題材で被服実習を組み込むことも検討していきたい。

3.2. 被服製作に必要な技能技術等と現行の学校種別製作題材の配置

被服製作の学習時間と製作題材を確認するために、表4に研究メンバー校の家庭科全体の学習時間と被服領域ならびに被服製作に配当された時間、製作題材名を示した。小・中・高等学校の全ての学校種において、研究メンバーの勤務校の学習時間が、教科書指導書に示された学習時間より上まわっていることがわかった。学習指導要領における被服製作の扱いは中学校では選択性に、高等学校(家庭基礎)については記載がない。しかし、高等学校に勤務する研究メンバーが、生徒の衣服の手入れや廃棄状況等の生活実態を鑑み、指導の必要性を強く認識していることを受けて、家庭基礎に製作を加えた。

表5は、被服製作に必要な技能技術等と現行の学校種別の製作題材を照らし合わせた結果である。被服製作に必要な技能技術とその関連素材は、現行の小・中・高等学校の教科書を参考に抽出した。中学校、高等学校において小学校で学習した基礎縫いが繰り返し行われている。

次に、表5にあげた被服製作に必要な技能技術とその関連素材について、学習指導が適正と思われる学校種を検討した(表6)。その結果、重点的に指導する必要がある項目の多くが小学校段階に配置される結果になった。そして、これらの項目の多くを実際に指導していることを確認した。指導されていない項目の「おりふせ縫い」は、高度な縫い方である。「製作手順図の読解」が十分に指導されていない点に注目した。児童生徒が各々に製作手順図を読み解きながら作業する訓練を十分に積んでいない。被服製作の基本的な技能技術の数は、加熱方法や切砕方法が他種多数ある調

理より少ないが、被服の製作手順図とその説明を記した「製作手順図の読解」は、調理手順を示すレシピを読みながらの作業に比べると難解である。難度は高いが、製作手順図の読解力をつけることにより、多様な被服の製作を可能にすることから衣服製作にとっての重要な力といえる。

以上の一連の検討を重ね、小学校においては基礎的な技能技術を扱い、中学校ではこれらの定着をはかり、高等学校においては製作手順を示す製作手順図を読みこなして作品を製作する力の育成にあたるのがよいとの結論に達した。

3.3. 被服製作に必要な技能技術等と学校種を考慮した製作題材の配列とその視点

表6をもとに、被服製作に必要な技能技術等と学校種を考慮した題材の配列を表7に示した。小学校においては、基礎・基本を、中学・高校においては、その応用を教えることを基本的な考え方としている。子どもたちの家庭での経験の少なさとそれに伴う技能ならびに技術力の低下については、前項で述べた通りである。加えて、家庭科に関する授業時数が減っていることから、小・中・高等学校の系統性を考えることは、重要なことである。

そこで、被服製作に時間がかけられる小学校では、基礎・基本にあたる技能指導の教材として、「小物」「ナップザック」「エプロン」をあげた。「小物」では、針と糸の扱いなど裁縫用具の基本的な扱いを教える(ボタン付けを含む。)ボタン付けを含む作品にすることで、研究メンバーが勤務校で実施している「プレスレット」を削除した。「ナップザック」では、袋物の基本の技術を教える。平面の布が立体へと変化することを味わわせたい。「エプロン作り」では、自分のからだの前半身を覆うもの、労働に活かせるものとしての価

値を大事にしたい。ミシンは、直線縫いのみで製作する。

中学校では、被服製作に多くの時間がかけられない実態を考慮して、1つの題材に絞って指導する。衣服の身体を覆うものとしての価値を大事にしたいと考えて、本研究では「ショートパンツ」を製作題材とした。体型と性差の関係をみると上半身は胸部のふくらみなどの男女差があるのに対し、ウエスト部分にゴムを入れた着脱式のショートパンツに性差による構造上の違いはない。また、ショートパンツは比較的に使用する布地が1m程度と少なく済む。以前は、生徒の1人ひとりが、自分のからだにあった型紙作りから製作する、という実践が多く見られたが、授業時間数が削減された現状にあっては、困難と考えた。そこで、市販教材を活用する学習を提案する。授業時間数によって、「印刷済み」「印刷・裁断済み」「印刷・ほつれ止め加工済み」などの中から指導教員が選択し、その中から自分のサイズに合ったものを、生徒が選択して使用する。ここでは、ミシンによる曲線縫いや、まつり縫いなどの技術を指導する。

高等学校においては、製作手順図を読みながら、作業を進めていく力を養いたい。製図手順の読解力をつけることにより、多くの作品を完成することが可能になる。各校の被服製作にける授業時間数や、被服室(ミシンが使える)の使用状況などの実態は様々であると考え、本研究では、ミシンを使わずに製作できるものの指導を製作題材に考えた。「マスコット」「コースター」「布絵本」「エプロンシアター」など、どの題材を選ぶかについては、該当学年の生徒の実態を踏まえて教員が学習のねらいを持って選択する。いずれも保育の内容とつないで指導するようにして、技術の指導とともに、実践化をねらいとする。製作にあたっては、手縫いを基本とし、ボタン付けなども取り入れな

表4 被服製作の学習時間と製作題材名

学校種	小学校		中学校		高等学校(家庭基礎)	
	研究メンバー校	教科書指導書 ⁵⁾	研究メンバー校	教科書指導書 ⁶⁾	研究メンバー校	教科書指導書 ⁷⁾
学習時間	家庭科全体 64(5年) 65(6年)	60(5年) 55(6年)	35(1年) 35(2年) 35(3年)	35(1年) 35(2年) 18(3年)	60(1年)	60
	被服領域	30(5年) 28(6年)	20(1年) 15(2年)	18(3年)	8(1年)	6
	製作学習	37(5・6年)	16(1年) 14(2年)	9(3年)	2(1年)	0
製作題材名等	基礎縫い(2)	針と糸を使ってみよう (小物入れ・ティッシュ ペーパー入れ)(8)	基礎縫い(5)	基礎縫い(ほころび直し・ スナップ付け)	基礎縫い(2)	なし
	模様づくり(8)	布で作る物を考えよう (2)			刺し子ふきん(2)	
	プレスレット(4)	ミシンを使ってみよう	ショートパンツ(25)	ショートパンツ ラウンジウェア フード付きベスト はんてん から選択	フェルト・スコット (2)	
	小物(4)	楽しく作って使おう(ラ ンチョンマット・クッション ・ティッシュ・ソックス カバー)(5)			コースター(2)	
	ナップザック(6)・ 体操袋(12)	自分の作りたい物を 考えよう(2)			袋物(2)	
	弁当袋(8)	製作の計画を立てよ う(3)			上記題材を年ご とに一つ選択	
	くふうして製作しよう (5)(ナップザック・手さ げ袋)					

5) 櫻井純子他、わたしたちの家庭科(家庭504)、開隆堂
6) 佐藤文子他、新編新しい技術・家庭(家庭703)、東京書籍
7) 宮本みち子他、新家庭基礎(家庭043)、実教出版

製作題材名等の()内の数字は学習時間を示す

がら、これまでの学習のまとめの時とする。

しかし、時間数の関係で未学習とならざるを得ない
題材も残り、今後の検討課題とされる。

表5 被服製作に必要な技能技術等と現行の学校種別の製作題材*

縫製技能技術とその関連素材		小学校	中学校	高等学校(家庭基礎)	
		題材	題材	題材	
技能・技術	縫う	玉止め	模様作り	基礎縫い	
		玉結び	模様作り	基礎縫い	
		なみ縫い	模様作り	基礎縫い	
		半返し縫い	小物	基礎縫い	
		本返し縫い	小物	基礎縫い	
		まつり縫い	小物	ショートパンツ	
		チェーンステッチ	体操袋		
		ボタンホールステッチ			
		直線ミシン縫い	ナップサック	ショートパンツ	
		曲線ミシン縫い		ショートパンツ	
	布はしの始末	ピンキング	体操袋		
		二つ折り	ナップサック・体操袋		
		三つ折り	体操袋	ショートパンツ	
		ロックミシン			
		ジグザグミシン			
		かがり縫い	弁当袋		
		袋縫い			
		おりふせ縫い			
	布の方向	たて、よこ方向(裁ち目、耳)	体操袋・ナップサック	基礎縫い	袋もの
		バイアス		ショートパンツ	
	採寸			ショートパンツ	
	型紙			ショートパンツ	
	デザイン	形	小物		
	色・柄	小物			
	装飾(スパンコールなど)				
アイロン仕上げ		模様作り・ナップサックなど	ショートパンツ	全般	
製作手順図の読解			(ショートパンツ)	(袋もの・マスコット)	
関連素材	編む				
	織る			コースター	
	布	さらし	模様作り	基礎縫い	基礎縫い
		フェルト	小物		マスコット
		ブロード	模様作り	ショートパンツ	
		ソフトデニム	体操袋	ショートパンツ	
		キルティング	ナップサック・弁当袋		
		合成皮革			
		その他 フリースなど			
		帆布			
	糸	種類・材質(手縫い糸)	模様作り	基礎縫い	基礎縫い
		しつけ糸		ショートパンツ	
		ミシン糸	ナップサック	ショートパンツ	
		刺しゅう糸	模様作り		
		刺し子糸			ふきん
		毛糸			
	付属品の使用	二つ穴ボタン	プレスレット		基礎縫い
		四つ穴ボタン			
		足つきボタン	プレスレット		
		スナップ			
		ファスナー	弁当袋		
		カギホック			
		マジックテープ			
	はと目(ボタン)				
	ゴムとゴム通し		ショートパンツ		

* 製作題材は、研究メンバーの勤務校であつまっているもの。

表6 縫製技能技術等と指導に適正な学校種

縫製技能技術とその関連素材		小学校	中学校	高校 (家庭 基礎)	高校 (家庭 総合)	未学習	
技能・ 技術	縫う	●					
	玉止め	●					
	玉結び	●					
	なみ縫い	●					
	半返し縫い	●					
	本返し縫い	●					
	まつり縫い		●				
	チェーンステッチ	○					
	ボタンホールステッチ				○		
	直線ミシン縫い	●					
	曲線ミシン縫い		●				
	布はしの始末	○					
	ピンキング	○					
	二つ折り	●					
	三つ折り	●					
	ロックミシン					△	
	ジグザグミシン		●				
	かがり縫い	○					
	袋縫い					△	
	おりふせ縫い					△	
	布の方向	たて、よこ方向(裁ち目、耳)	●				
		バイアス		●			
	採寸			●			
型紙		●					
デザイン	形	●					
	色・柄	●					
	装飾(スパンコールなど)			○	●		
アイロン仕上げ		●					
製作手順図の読解				●	●		
関連 素材	編む					△	
	織る			○			
	布	さらし	●				
		フェルト	●				
		ブロード	○	●			
		ソフトデニム	○	●			
		キルティング	●				
		合成皮革				△	
		その他 フリースなど				○	
		帆布				△	
	糸	種類・材質(手縫い糸)	●				
		しつけ糸		○			
		ミシン糸	●				
		刺しゅう糸	○			●	
		刺し子糸				△	
		毛糸				△	
	付属品の使用	二つ穴ボタン	●				
		四つ穴ボタン	○				
		足つきボタン	○				
		スナップ				○	
		ファスナー	○				
		カギホック				○	
		マジックテープ				○	
	はと目(ボタン)				○		
	ゴムとゴム通し		●				

重点的に指導、 補助的に指導、 未学習

表7 被服製作に必要な技能技術等と学校種を考慮した製作題材

縫製技能技		学校種		小学校					中学校	高等学校 (家庭基礎)	高等学校 (家庭総合)	未学習
		模様つくり	小物	ナップ サック	弁当袋	エプロン	ショート パンツ	袋物, マス コート	コース ター	袋物,マ スコッ ト,コー スター	布絵 本,指 人形	
技能・技術	縫う	玉止め	●									
		玉結び	●									
		なみ縫い	●									
		半返し縫い		●								
		本返し縫い		●								
		まつり縫い						●				
		チェーンステッチ		○								
		ボタンホールステッチ								○		
		直線ミシン縫い			●							
		曲線ミシン縫い						●				
		布はしの始末			○							
			ピンキング		○							
			二つ折り		●							
			三つ折り		●							
			ロックミシン									△
			ジグザグミシン					●				
			かがり縫い				○					
			袋縫い									△
			おりふせ縫い									△
		布の方向	たて、よこ方向(裁ち目、耳)		●				●			
		バイアス						●				
	採寸							●				
		型紙			●		○					
	デザイン	形		●								
		色・柄		●								
		装飾(スパンコールなど)						○		●		
	アイロン仕上げ			●								
	製作手順図の読解							●		●		
関連素材	編む										△	
	織る								○			
	布	さらし	●									
		フェルト		●								
		ブロード	○					●				
		ソフトデニム					○	●				
		キルティング			●							
		合成皮革									△	
		その他 フリースなど									○	
		帆布									△	
	糸	種類・材質(手縫い糸)	●									
		しつけ糸						○				
		ミシン糸			●							
		刺しゅう糸	○						●	●		
		刺し子糸									△	
		毛糸									△	
	付属品の使用	二つ穴ボタン		●								
		四つ穴ボタン		○							○	
	足つきボタン		○									
	スナップ									○		
	ファスナー				○							
	カギホック									○		
	マジックテープ									○		
	はと目(ボタン)									○		
	ゴムとゴム通し						●					

重点的に指導、 補助的に指導、 未学習

4. 要約

本研究では、現状の授業実践から被服製作の課題を明確にしたうえで、被服製作に必要な技能技術等と、現行の学校種別の製作題材を検討した。被服製作に必要な技能技術等と現行の学校種別の製作題材を検討したところ、重点的に指導する必要がある項目の多くが小学校段階に配置されており、中・高等学校での重複が顕著となった。そこで縫製技能技術等について、指導が適正な学校種について考察を行った結果、小学校で基礎的な技能技術を扱い、中学校ではその定着を、高等学校で製作手順図を用いた作品製作の力の育成を目指すのが望ましいという結論に達した。最終的に、被服製作に必要な技能技術等と学校種を考慮した、小学校から高等学校までの製作題材を提示した。

提示した題材は、縫製技能技術が発展的に身につけられるよう配列されたものであり、今後の被服製作の授業計画において指針となり得る。今後は、この配列にもとづく授業実践が課題である。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省、小学校学習指導要領、1998
- 2) 文部科学省、中学校学習指導要領、1998
- 3) 文部科学省、高等学校学習指導要領、1999
- 4) 鈴木洋子、これからの中学校家庭科における被服製作実習・調理実習について - 家庭科担当教師の意識 -、日本家庭科教育学会誌第32巻第3号、pp.9-15、1989
- 5) 櫻井純子他、わたしたちの家庭科(家庭504)、開隆堂、2005
- 6) 佐藤文子他、新編新しい技術・家庭(家庭703)、東京書籍、2005
- 7) 宮本みち子他、新家庭基礎(家庭043)、実教出版、2005